

常なるあすか川昨日の淵ぞ今日は瀬になる」（古今集・詠み人しらす）と、川底の変化がうたわれている。

万歳の歓呼の声の立ちかへり山間の駅ひと疎なり

渡辺はるか

今は過疎になつた山間の駅に、六十数年前の出征兵士を送る歓呼の声が立ちかえる、というのである。半世紀以上昔の歓呼の声の記憶が、よけいに今を淋しくさせる。

空中と水面で脚をいつぱいに広げるアシナガグモと

アメンボ

「アシナガグモ」と「アメンボ」、意外な取り合わせが楽しい。脚をいつぱいに広げる虫という共通性で取り合わせられた両者。なるほどと頷きつつも、やはり意外な取り合わせである。意外性は、短歌を読む楽しみの重要な一つであることをあらためて思い知らされる。

不器用な踊り手われば電柱が揺れるような姿で踊

る

小林まや

「電柱が揺れるような姿」は自画像だが、シンプルで明快そして愉快だ。前の作によると、町内の祭りに、組長とか区長とかの役の人は全員踊らされたらしく、組長である作者はどうしても踊らないといけないらしい。ただ、歌としてみると、第一・二句は、なくともいい。省きたかった。

椰子の樹をならべて夏のラ・セーヌの砂のビーチの

ひと、ひとだから

服部崇

「二度目のわが夏」という語が一連中につけて、旅人

の目で見たのではないパリの空氣、セーヌ川の表情がうたわれている。街の空氣や川の表情などを表現するのは難しいのだが、今月の作は、なかなか健闘していると読んだ。この作、下旬にうまく句割れを作つて、リズムに屈折感をもたらした。

陶の猫笑うブローチいただけり猫の話の限りもある

ぬ
本島泉

「猫笑うブローチ」が独特。作者には絶対に笑つていようのみえるのだろう。新歌集『虫たちの宴』を刊行した作者。郡上大和で開かれた出版記念会に参加してきた。歌集のタイトルには猫が出てこないが、猫の歌が頻出する歌集である。出版記念会でも猫の話題がさかんに出ていた。一時は四十四とか五十四とかの猫を飼つておられたらしい。

夏の日の銀紙のやうな大通り向かうでだれか手をふりくるる

松本ちゑこ

「銀紙のやうな大通り」が一首中でリアリティを持ったところがポイント。人通りの絶えた大通りに真夏の太陽が照りつけているのだろう。

ふくしまの風景として立ち続く幾千体のモニタリン

グポスト
本田一弘

放射線を定期的連続的に監視測定する装置をモニタリングポストというのだそうだ。福島ではない「ふくしま」を意識的にうたいつづける作者。上句に読めるやう場のない思いが切ない。